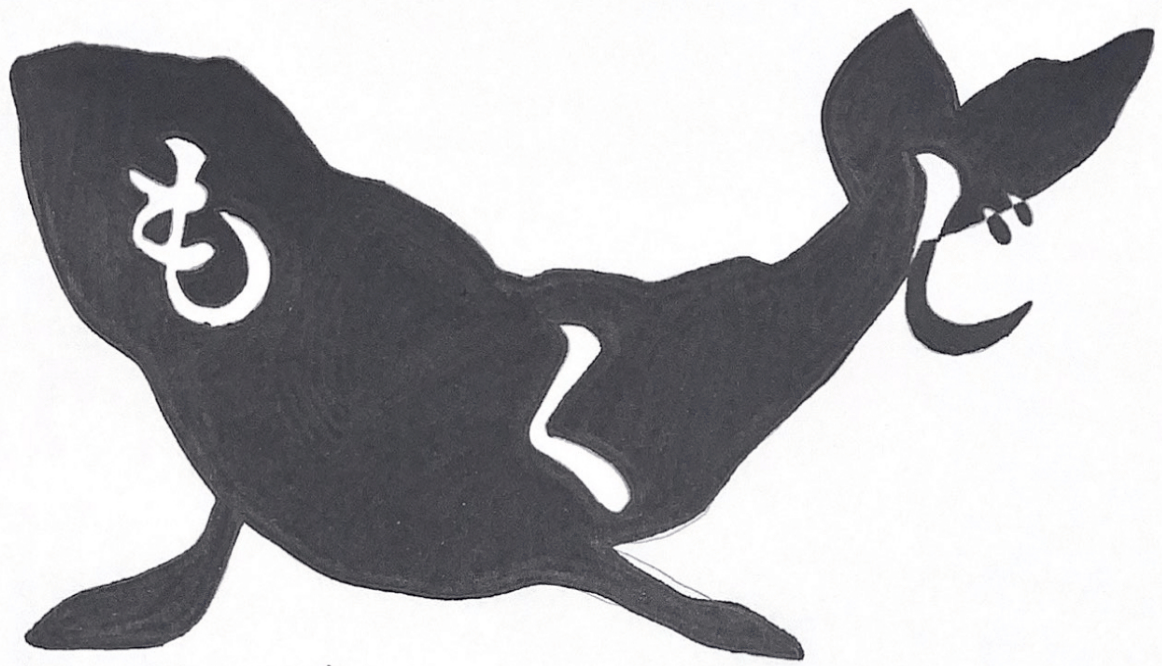




しよふし
のね
か



 前書き

 イラスト

• もちまる

• 冬月

 小説

• 篝火 『ワジラの箱星』

 後書き

まえがき

こんにちは！ 現代視覚文化研究会、略して「げんしけん」会長のもちまるです。「現視研」と略す方が正しいのですが、変換が面倒なので「げんしけん」としておきます。この度は2021年度秋会誌「なけなしのかね」を見に来てくださりありがとうございます。

今回、高専祭がまたしてもオンラインでの開催となりました。ということで、この会誌もホームページ上で公開されているはずで、げんしけんの手だけで公開するより多くの人の目に入っているかと思えます（希望的観測）。これは、最近会誌をまともに配れていないげんしけんに舞い降りたまたとないチャンスに違いない！ ということで、少しだけげんしけんについて紹介します。

げんしけんは主に、イラスト、小説、音楽、ゲームを作り、季節ごとに会誌として発表するといった活動をしています。別にこの種類の活動以外やってはいけない、というルールはないので、やろうと思えばだいたい何でもできます。体育館横の部室棟に部室がありますので、興味を持った方は是非見に来てください！

さらに、宣伝を続けさせていただきます。さっきから言っているげんしけん用ですが、「奈良高専 げんしけん」などのように調べると、一番上に出てきてくれます。過去の会誌も見られるので、良ければ覗きにきてくださいね。

それから、Twitterもやっております。IDは「@nct_mvc3」ですので、この機会にフォローお願いします！

小説ならともかく、まえがきなんてあまり長々と書いても読みにくいだけなのでこの辺で切り上げさせていただきます。それでは皆

さん、「なけなしのかね」及び、高専祭を楽しんでいてくださ
い！

もちまる

もちまる





冬月

クジラの箱星

篝火



本当に一瞬の出来事であった。何気ない日々、何気ない行動。ふとしたその合間に、『視線を感じた』としか表現出来ない違和感。実際そんな第六感が目覚めている特別な人間という訳でもないし、そもそも交友関係の浅い私への視線なんて大したことでもないはず。ふと空を見たのも何気ない行動として終わるはずだった。

雲よりはるか上から覗く黒い天体

ゆっくりと明滅したそれは、まぶたがあるから。人とはかけ離れているが、それははつきりと何かしらの生物の眼球であった。体と相当する部分は青みがかって空と気づかなかったのか。もしくは空に境界線がない現実離れた巨体だからだろうか。

発せられる怪音

音の暴力。思わず耳を塞ぐが、己の意思とは関係なく力が抜けていく。酔いのような不快感に眠気のような優しさ。視界の端に眩い光が迫って、私の意識は無くなった。



『説明して少しは落ち着いたか?』

どうでしょう。まだこの状況が理解出来てない以上全部夢かもしれないです。私自身も冷静に考えてるように見えても、現実逃避してるだけかも。

目が覚めた時には、もうパニックは始まっていた。紫がかった空に、クレーターまで見える巨大な天体。そして空の半分を占める、悠々と宙を泳ぐ『それ』。幾分か小さくなった分その全体像が分かるようになった。

外見を一言で表すと、羽の生えた鯨。上空を泳いでる以上腹部をこちらに晒しているが、その腹部にはびっしりと角張った……鉱石? がこびりついている。断言出来ないのはその鉱石が直視すらできないほど発光して地上を照らしているからだ。よく見ると辺りは真昼間と間違えるほど明るいのに太陽が存在しない。地球ではないどこかに、街ごと移動させられたのだ。

けたたましいクラクションの音は聞きなれた自動車のもので、周りは家を出た街並みと変わっていないが、何度かすれ違った程度のご近所さん宅の窓ガラスが割れていた。そこから先は……

『意外と脆いもんだな。低位種は。思い出したくないならいぞ』

街丸ごとと言っても四方約十キロ程度が切り取られたようだった。境界線では電線が切られているため電気はつかない。警察署や公共施設に人が集まり、ゾンビものでもなく下手に意識があるため人同士で争いが起きた。

携帯はもちろん圏外。人伝で境界線の外側が確認されれば、頭の回転の早い者がたちがスパー等にも立てこもり食料を独占し始める(その筆頭には警官もいた)。この世界の層がどうかは知らないが、体感で僅か三日。現状は誰も把握出来ないだろうが、法が無くなった街は壊滅状態となった。……以上。

『街の隅で行き倒れていたお前を、俺が拾ったと』

そこから今この時まで記憶無いから、多分そんな感じですか。あなたはこの世界の人間?』

『俺のこのナリを見て同族と捉えるのか?』
少なくとも……コミニケーションがとれるのは人間だけでしたね。

皮肉のように彼は口にする。四肢に頭部があり、二足歩行で言葉話すことは共通。身長が二メートル後半。肘から先が肥大して凶器的な爪。顔半分を覆う割とグロテスクな捻れ角。時折見せる物理法則を無視した身体能力……を持っていたとしても、おそらく『人』の延長線上だ。

『質問の答えはバツだ。俺は元々この世界の住民じゃねえし、最後の一人ついで特別さ溢れるれっきとした上位種として名称がある。それに関してはやんと話してやるが、とりあえず名はクランだ。好きに呼べばいい』

クランさんもあの鯨にこの世界に転移させられたと?

『クジラ……クジラ。あれに似た造形の生物が存在するのか? 神格化された霊獣や神獣じゃなく?』

ぼやけてるからよく分からないけど多分似てるだけだと思う。
『それで通じるならクジラとして説明するか。俺たちはあの神獣のことを『ロウ』と呼んでいる』



神獣ロウは明らかに知性があるが、幾ら対話を試みてもそれに応えようとはしない。だから俺たち独自の解釈でしかあいつを説明することはできない。

ロウは星を渡る神獣だ。この星の始まりは知らんが、岩の塊でしか無かった一つの天体を緑と生物の溢れる星とした。この星に恒星がないため腹部の器官で地上を照らし、水やら生物はお得意の転移術によって強制的に持つてくる。

『最初に呼び出された知的生命体とは、俺たち鬼人種に、まあちよっと前の世界から因縁のあった吸血種と龍種だ。俺たちはいつか戦争を再開するとしても、前の星が止まるに止まらない状況だったから戦争を続けていただけで、一時休戦とした』

神獣は緑で基盤を作った後に、様々な世界から色んな種族を呼び出した。そうになると、世界の中でもレベルが生じてくるわけだ。俺たちを脅かす存在は確認したことが無いから、俺たちを上位種として、

『文明が発達してるか、——が使えるか。——を知っているか。とかでレベルを決めていった。無害な奴らを意味無く殺戮するのは違う』
今なんて言ったの？

『聞き取れなかったらそれはその世界が低位だったことだ。概念的に存在しないものだからな。そもそも、今俺の言葉が通じているだろ？』
確かに。克蘭さん全く口が動いてないのに私聞き取れてる。そもそも日本語じゃないし。

『ニホンがなんか知らんが、これは上位種の言語だ。まあ相手に伝わるように翻訳される。別の種のやつに自分の種特有の現象など説明した時には伝わらねえ。それは世界レベルでも有効だったってことだ』

神獣は大方仕事をすると、星を回りだし、世界に昼と夜を与えた。ちよっとの

んびりしすぎると昔から思うが。

そして俺たちは戦争を再開した。種として決まったテリトリーを持たない俺たちは、鬼人種が俺一人を残して絶滅し、現在は吸血種と龍種との戦争だ。鬼人種がやられたのがだいたい……五万年ほど前。それからアイツらは他の低異種、中位種の巢やら街を気にしなくなった。

『今では両者とぶつかる頻度は少なくなったが、百年に一度は何処かしらの森や街が焼け野原になる。無意味な殺戮はしない。その分本来の生物とした感じが』

上位種同士のぶつかり合いは生態系を壊す。命を奪うだけでなく、何千年と残る灰。世界を汚染し、肥やしにもならない。

これに動いたのが神獣ロウだ。吸血種と龍種がぶつかった灰の大地に、覆い被さるように地盤ごと新しく大地を転移させる。不毛の大地が重なり、取り返しがつかない状態になった際、ロウが世界を転移させるのがだいたい数千年に一度。

『あの街も、一年前にはホビット族つー小さい中位種の街だった。単なる流れ弾で街一つ簡単に消えちまう。荒々しい墓石だがあいつらの灰が今もあの街の下で眠ってるよ』

克蘭さんは訪れたことがあったのですか？

『それなりに大きかったし興味本位で寄ったことはある。もちろん身分は隠していたが、中位種は他のエルフやノーム等と交易をしているからな。ああすまん、全然聞き取れなかっただろ』

いえ、全部分かりました。
『なんでだよ』
なんででしょう

ゲーム脳が役に立った瞬間であった。



『お前がこの世界で生きてくため俺が色々教えてやるよ』

疑ってる訳では無いんですけど、なぜこんなにも良くしてくれるんです？

『一度助けた以上すぐ死なれちゃ寝覚めが悪いのが一つ。あと同族が居なくなつてからまともに会話したやつは久しぶりなんだよ。お前が同族のところに戻りたいつつなら話は別だが』

……いや、多分帰ることは無いので。これからよろしくお願いします。

『急に堅苦しくなるな。まあいい判断だ』

特に仲のいい友人がいる訳でもなく、心残りもない。両親も多分あの時間帯なら職場で働いているから転移には巻き込まれていない。人間なら遅かれ早かれまとまりを持って動き出すだろう。

そうなればいざれどこか別の種の街で再開するかもしれない。今は自分たちの街一つ管理できない以上、克蘭さんという先駆者について行った方が安全だ。

『そんなじゃとりあえず移動するぞ。ここは危険だ。一番近いノームの街までだいたい……お前の歩幅に合わせてひと月。お前の世界のこともよく聞かせてくれよ』

危険……とは？

『気にすんな。二日後にはわかる。それまでは同族たちの無事を祈っとけ』

克蘭さんはそのまま荷物をまとめて歩き出す。そつと振り返れば森の中にポツンと置かれた街並み。所々から煙が上がつているが、今は帰る気がなくともいつか恋しくなつて訪れるかもしれない。柄でも無いのに、最後にその目に焼きつけてからその場を去った。

『ここらは窪地だ。だから昔のホビット族はここに街を築いたが、そりゃ馬車などの交通機関があつたからだ。道なりに進むが坂道になるぞ。キツかったら言えよ。すぐお前を抱えて跳んで行ってやる』

わざわざありがとうございます。だけど話す時間になるので、根はあげません。

『そうだな。んじや早速。今のところこの地域はロウの転移術の影響でかなり身体が軽い。離れば離れるほど今以上に疲れやすくなるが、どんな感じだ？』

……地球といった頃と変わらない。ヤバいですかね。私運動できない方なんです。

『と、なりやあ。食べられる実教えるからそれとことん食つて身体を慣らせ。ロウが基盤を整える時に呼び出した植物だ。この世界に順応する術がかけられる』

もしかしたら星の規模で地球と全く違うんじゃないだろうか。この世界である『ロウ』の全体像が掴めたのもより上空を飛んでるからとか。

『それと、お前から人間の寿命つてどれくらいだ？いつかやりたいことが見つかつてこの世界は広い。さすがに低位種は不老つてことは無いだろうが』

8年ほど……あ、地球の暦で考えてだからこの世界ではどれくらいだろう。

『にしても短いな。大陸踏破は夢のまた夢だぞ。上位の世界には不老になる方法でもんがあつたが、正直機会があつたらどうだ？死ぬ時に死ねるつて考えりゃそこまで怖いもんでもねえぞ』

上位種ともなれば命の価値観も違うのだろうか。不老不死なんて恐ろしいワードである。この世界に毒されればいつか手を出すのだろうか。

いや、戦争を経験してる人達だからかな？

『他になんか聞きたいことはあるか？なんでもいいぞ。今更俺に隠しときたいことはねえしな』

カカカと軽快に笑う鬼人種。その捻れた角やこの世界のことと質問は尽きないが、今一度はぐらかされた答えを聞いた。

『なんだ？』

ここを離れる意味。危険つてなんのこと？私の同族の人間はみんな死んでしまつてことですか？

『……お前がああ街に戻る選択をした場合、俺はもうお前のことを置いていくぞ』

差し出された手を話す馬鹿はしません。私も命は惜しいから。

暫しの沈黙、そして。

『無意味な殺戮はしない……俺たち三種で交わした契約はもうそこまで意味は無いんだ』

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

二日後。やっとの思いで山の峰にたどり着いた私たちは、眼下の街を見下ろせるようになった。青く、淡い光。人工光のようにも、自然の発する光にも見えな
い。そんな光が街を包んでいる。

『翼人種って中位の奴らがいる。アイツらは新しい種を見つけるなり、コレク
ションしようとするんだ。その文化を、種を何もかも。ああ、相手の尊厳は守っ
てるさ。前者なら特産品とか軽い買い物程度。後者ならちよつとした記録、記述
として終わるはずなんだ』

あの街で、人間の身体をしていても得体の知れない生物が突然降り立ったらど
うなるだろうか。コミニケーションを取ろうとする？はたまた命知らずに攻撃し
ようとするか？

その予想は分らない。現在どんな思惑がああ街で繰り広げられてるかも知ら
ないのに。逃げ出した私に分かるはずもない。
だけど、ああ光が、結果だけを教えてくれた。

『全ての人間がああ街に残ったかはわからん。あそこには特別な移動手段もあ
っただろう？外に出た人間が他の道に進めば別の街についてるはずだ』

少なくとも、私の故郷はもうなくなってしまったわけだ。

両親との家も、通っていた学校も全て。
どこからともなく、息が湿っぽい。

世界を回るクジラの神獣『ロウ』は、この世界に来て始めて地平線へと沈んで
いく。地球よりも長い、夜が訪れる。



「ありがとうございます。なんてお礼を言ったらいいか」
持ちつ持たれつです。皆さん。力仕事はお任せします。

「ガッテンでさあ。嬢ちゃん」

先日、ロウがまたとある街を転移させて来たとの報告を受け、近隣の住民から
情報が入った。この世界に国は無い。種族同士の諍いはないといえは嘘になる
が、基本的にこの世界の摂理に関して住民たちは寛容だ。

見慣れぬ世界へと急に飛ばされれば混乱するのは必然。自分たちも経験したそ
の天災に皆で助け合おうというスローガン。

綺麗事と笑えばそれでいい。ただ私はこの世界で生きがいとして幾つもの夜を
超えた。

それにこの世界で何か特別なことをした訳では無い。ちよつとした『言い出し
っぺ』になり、行動に移してれば、世界の街を回るうちにどの街でも当たり前
の習慣になっただけだ。

立てる？お父さんとお母さんは？

「森の中を探索するって……言っただけ」
わかった。また崩れそうだから向こうの広場に集まってね。植物のお姉さんた
ちがご飯用意してくれてるから。

耳と尾の生えた幼い獣人の子供をあやし、行方不明者として二人の名前を魔術
で避難所のエルフに伝える。この世界の食べ物食べてひと月ほど。私は中位種
の専売特許である魔術の一端に触れた。万能という訳では無いが少なくとも見よ
う見まねで維持し続けられ何とかなった程度。今回もテレパシーという魔術界限
では初歩的なことしかできない。

ただそれでも、クランさんから教えてもらった知識に、色々とドーピングしま
くった身体。中位種に遅れを取らない程度として上位言語も習い自立できるよう
になった頃、私はクランさんと別れて旅をした。

誘惑に負けて不老の薬を飲んだあの日、いつものように軽快に笑いながら。

『やることをやってくる。まあまたいつか会えるさ』

不老者同士の軽い約束を交わして、念の為歳は数えているが何百年と世界を渡
り歩いている。

「嬢ちゃん！重傷者一名！耳長に伝えてくれ」

……！わかりました。

追加で連絡を回し、バッグから薬を取り出して声のした方へ向かう。傷口を押さえて真っ赤になった手。奥の方は目立った傷は無いが、顔色が悪い。意識もなく衰弱しきっている。

すみません止血剤と増血薬です。奥の方！病気でですね。結界を張るので離れてください。

「お、お。こいつは手当したら直ぐ向こうに持っていく」
くれぐれも安静に。二人以上で運んでください。

患者と自分を包める程度の結界を張って患者の口に種を入れる。植物種ドライアドの分体の種。荒療治だが、この世界の病気かどうかとも判断できないため体に根を張って取り除いてもらうのが最善手。

明確な意味は無くとも、こうやって動き続けることが間違ってるなんてことは無い。私はこれからもそうやって生き続ける。



克蘭さんが亡くなったと聞いた。絶滅したと言われていた鬼人種が遺体となつて見つかった。死ねば灰になる吸血種を除いた上位種、龍種と鬼人種はその遺体が腐敗するのが極端に遅い。地層から偶然でできたとして、上位種の規格外さを知らない者たちは死因をロウの呼び出した岩盤に圧死されたものとした。

克蘭さんから聞いた話は、鬼人種は狩られればその体は全て武器になるため回収される。故に自分以外の鬼人種を見れることは無いとも。

あの日に私たちは別れてから、一度も会ったことがなかった。たとえ私の容姿が変わらずとも、きつと何かしらの言葉を交わせた。

世界は、未だに吸血種と龍種との戦争が続いている。ただその衝突の機会がめつぽう減り、異なる種族の者たちは共同した街を作り始めた。バザーのような簡易的なものではなく、法が整備されたれっきとした城塞都市。

近くで衝突があれば生まれ故郷を捨てて逃げるといふ過去の常識は無くなつた。生まれ育った街に永住し、骨を埋めることが常識となり始めた。

あなたが聞けば、どう思うでしょうか。
この世界は、より良くなったと言えましたか。

意外と、どうでもいいなんて笑われるかもしれない。

「魔女様。どうかされましたか？」

すみません。……考え事をしていました。

「魔女様でも悩んでしまうことがあるのですね。この老いぼれには相談できませんか？」

悩み……という程ではありません。感傷に浸っていただけです。

「左様ですか。貴方様はいつも一人で何もかも解決していきますから、こちらとしては申し訳ないくらいです」

私も皆さんに助けられています。この国に置いてくださってることもとても感謝しています。

「恩人を無下に扱う者が王なんて肩書きを背負えませんが。それも魔女様となるとなおります」

政務に疲れ一時間ほど執務室で休憩中……という名目上、国内の結界にも反応できない速度で私の家に遊びに来る。老いぼれと称しながら、本当に老衰する間際まで若い姿を保ち続けられるエルフの老人。

建国から今まで国を支え続けた国王その人だ。ロウにこの世界に飛ばされ、路頭に迷っていた頃に出会い、意外と長い付き合いになった。執務の間に遊びに来る陽気さは子供の頃と変わらないが。

今は国王ではなく一人のエルフの老人として、開けられた窓から下の広場を見下ろす。この時間帯なら教育機関から帰った子供たちが溜まって魔術の練習をしている頃だろう。

「エルフに、ドワーフに、獣人の子も、今の子供たちは魔術が一般的なものとして普及しているらしいですね」

私がこの世界に来た頃、簡易的な広場でエルフとドワーフが物売りしてる時に喧嘩してるのを見ました。あの時は感動しましたけどね！

「その種族はいがみ合ってたなんて言っても信じてくれなさそうですね」
時代が流れていくのは寂しいと感じますか。

「ドワーフ達の技術の鍛造も意外と奥が深いですよ。一度も昔の方が良かったなんて思ったことはありません」

窓の上から手を振っている。口うるさい宰相に告げ口されればどうなるかわかっているだろうに……。

「子供は嫌いですか？手を振ってあげましょうよ」
大嫌いですよ。身長抜かした途端に直ぐ調子に乗る。

「尻叩きとか……していませんよね？」
貴方からその話題を掘り返されるとは思いませんでした。

ところで、本日はいつもより早いご来訪ですが、時間にルーズなものではなかったですか？

「……魔女様に相談しに行くと言えてあります。休憩時間を削ってでも問題を解決しようとする素晴らしい国王ですよ」

「あああああ待ってください！本当に大事な要件なんです！」

宮殿の連絡用魔術を展開したところで、老いぼれからの制止が入る。人の悩みは聞くせに自分の要件を忘れかけるとはいい度胸である。

それほど大事な要件とは思えません。

「魔女様に頼まれていた龍種の活動記録です。観測隊が送ってきました」

「……？随分早いですね。昨年度頂きましたが。」

「『偶然』観測できたのです。先月別部隊に乗っていた観測隊が、帰路の途中目と鼻の先の森から龍種が目覚めるのを確認しました」

「……記憶が正しければ三年前にも……」

「はい。私にそのデータはありませんが、これは異常事態なのですか？」

龍種と吸血種の活動記録は私にしか需要がない。経験的に吸血種と龍種の衝突する地区を絞り、その付近の街に避難勧告を出すためだ。

いつの間にか様々な国から敬意を込めて魔女様と呼ばれてはいるが、まあ今のところ予想は外したことがないため信頼されている。動きやすいという利点があ

る以上魔女という呼び名は継続した方がいいだろう。

ただそれでも、連続的に復活した龍種。そしてめっぼう聞かなくなった吸血種の情報。これは近いうちに……

戦争が起きますね。

「そうですか……また調査に出かけられるので？」

直ぐにでも。……貴方と話せるのはこれが最後になりますね。

「まさか。数年経てばすぐに帰ってくるでしょう？」

……ええ。必ず。それなら貴方も私がない間にぼっくり逝かないでくださいよ。

「はは。この身体に負担をかけないよう早く後継者を決めるべきですね」

これは過去の言い伝えとして正否が定かではない情報。ただ確かに、クランさんの遺体が見つかった地域にて、黄金の龍種の目撃情報があった。



『随分と……懐かしい匂いがある』

それはどうも。ですが聞いててあまりいい言葉ではありませんよ。

それは圧巻と言える大戦だった。文字通りの全面戦争。世界を総べる二大勢力が、示し合わせたように集まり、対峙する。

片や小山のような巨体、それを覆いかぶせるような翼。羽ばたくこともせず、ただそこに静止している。その存在は神とも例えられ、記録にあった龍種。計八体。

片や黒い霧。両者の中央に立てば世界の半分が闇におおわれたように見えるだろう。一つ一つが分体。殺そうとして殺せぬ、規格外の魔術を駆使する吸血種。外部からエネルギーを取り入れ、分体とするため、実質無限。本体の数で言えば、クランさんからの受け売りだが、四百体前後。

合図などある訳もなく、各々、因縁の相手を滅ぼさんと、これまでの魔術が遊びのように感じる規模で、世界が彩られていった。

魔術の余波が山を抉り、雲を裂き、難攻不落と言われた龍種の鱗を一枚二枚と剥がしていく。

対する龍種は、尾を降れば地を割り、口から吐いた収束した熱線で海を蒸発させる。

吸血種は無敵と呼ばれていたが、どうやら分体を増やしすぎると己を維持できなくなるらしい。黒い霧から飛び交う魔術の密度が低くなるのは、その分やられているものが多いのだろう。

だが龍種の方も一点狙いされればどうしようもない。途方もない生命力で、翼を折られようが体に穴を開けられようが熱線を放ち続ける。それでも一体、また一体と体を半壊させてやっつと地に落ちていった。

そして終わりは突然訪れる。

半月以上続いた大戦は、龍種の方が五体目まで崩れ落ちたところで変わった。それぞれ口を開け、その眼前にとつもないエネルギーを収束させていく。拡散されればこちら一体は全滅。私も焦るほどのその行動に、吸血種は分体全て消失し、一点に集まり始めた。

これまで龍種が放ってきた収束型にさせることで相殺させる狙いである。相手を滅ぼすことが第一ではなく、生き残って覇権を握る事が目的だ。拡散型にすれば吸血種は殺せるが、同時に重なっている自分たちも死んでしまうことに気づいた龍種は、狙い通り体勢を変えて吸血種の一点に向ける。

凄まじいエネルギー同士のぶつかり合い。

世界から音が消え、光に塗りつぶされ、ただ超常すぎる力は地上への被害を一定に、それ以上蹴散らすことはしなかった。溶解する世界の一つ。弾けたエネルギーが空へと飛んでいき……。

あつ

悠々と泳ぐ『それ』の尾ひれに直撃する。

龍種も吸血種も抗えずにこの世界に呼び出した神獣『ロウ』が、始めて怒り

とも取れる感情を乗せて鳴く。

直後、それぞれの最大火力を撃ち合う両者を覆うように、空に魔法陣が浮かび上がった。

そしてロウが転移させたのは、星そのもの。無理に凝縮させ赤熱した隕石。星ごと壊すつもり神の一手。

そこからは驚きの連続だった。吸血種の背後、山の中から伸びた青い光。龍種の背後、海の底から伸びた黄金の光。それらが示し合わせたように戦場を囲い、絡まりあつてそこから一体に魔法陣を映し出した。

天井のロウの魔法陣と対をなすように練られたそれは、そのまま全てを包み込んで……

貴方が青い光で全てのエネルギーを転移させたのですね？

『低位種が軽々しく口を聞くなど言いたいところだが、なるほど、全て彼奴に踊らされたわけか』

勝手に納得しないでください。話を聞いてくれるなら、中位種、低位種を代表して今後のことについて話し合いたいです。

『よからう。許す』

吸血種の王。長身ではあるがその肩書きに似つかわしくない可愛らしい女性であった。その赤い目は生物の頂点としての冷酷さを持っているが。



その前に一つ、貴方は克蘭さんという鬼人種を覚えていますか？

『忘れるはずがない。我ら因縁の関係。彼の者の狙いは我ら二人の全てを消し去ってしまった』

目の前に伏せる黄金の龍種。大地から響く上位言語に克蘭さんは相對して話すだけでもかなり手加減してくれてたと改めて思う。

黄金の龍種の王はあの日、克蘭さんが命と引き換えにした契約を語ってくれ

た。曰く、吸血種、龍種それぞれの争いを禁ずること。自分たちが対戦のために力を蓄えるその期間。

『己が命と引き換えに数千年間の停戦。彼の者が生き残っていたことに驚いた我らは、確実に彼の者の種を奪うためその契約に則った』

『ただ、力が強いと言うだけで王になった貴方たちに従う者はいなくなつた。』

『然り。あの日よりまだ一千年も経っていない。我らは我らの下僕達が血を流そうと、その契約に殉じた。だが、あの神獣の行いには、この星を守ることを優先してしまつた』



『もとより私が王位を引き継いだ時、そういう輩は既にいた。吸血種が先に龍種に先制攻撃を仕掛けようとするのも、彼奴は計算したんだろう』

『お先真つ暗と言うものか？なるべくして、我らは彼奴と同じ、最後の生き残りとなつてしまつた。龍種は過去より一度も増減していないし、私の能力で全ての吸血種は把握出来る。さて……魔術も使えない。神すらも知らない低位種よ』



『我らを殺すか？』



『我らを殺すか？』



『汝の狙いは彼の者の敵討ち。或いは世の平定であろう。中位種の罪なき国、街を我らは天災として滅ぼしてきた。だが……』



『調子に乗るなって言つてやろう。龍種の王とも会っているのだろうか？万一にも勝てる見込みがない上、どちらかを殺せばその瞬間この世界の王が決まる』

『……は？』



いえ、確かにあわよくば漁夫の利なんて思つてないことはなかつたです。貴方たちが出陣していないのは予想外でしたが、予想では龍種が勝つていたでしょ？克蘭さんから貰つた簡易の空間転移術式。首元に展開してやればさすがに死ぬでしょう。

『……なかなか、えげつない戦法であるな』

まあこの状況で貴方たちに敵対するつもりはありません。なので私の目的は、克蘭さんと同じように、契約を重ねに来ました。



『契約を重ねる……我らを上位種と知つてのことか？』

その言葉、最後の一人として言えます？克蘭さん曰く、『それ』、名乗る程虚しくなるものらしいですよ？

『……はははははは』



『ならば一つの龍として重ねてやろう。ただし命を捧げるという前提は無しだ。その命を以て、契約に従うがいい』

貴方たち龍種、吸血種は絶滅しました。そう、この世界を騙し続けます。そうすればロウが作るこの星という箱庭は壊れることなく完成する。危険に怯えない世界。貴方たち上位種も、そのために争いあつたのでしょうか？己を脅かす存在を認めないために。



『それで世界が変わるのか？貴様ら低位種や中位種は我らより多い。争いごとなど、種族ごとに無限に湧いてでる』

『私』がそんなことさせないと契約します。こう見えて、魔術は初歩的なことしかできないくせに、魔女なんて呼ばれてるんです。私が生きてる間は、決して戦争なんてさせません。それが、命を賭けた、契約です。

『……そうか』

龍種の王、フェイロンが誓おう

吸血種の王、ルシフが誓う

鬼人種の王、クランの誓いに重ね、今一度、世界が平穏であることをここに



神獣『ロウ』が二声鳴いた。かつて、上位種と呼ばれる吸血種、龍種が激突し、絶滅した地域、黒焦げになった大地に、新たな地盤が転移させられる。

「なんだよ、ここ！空が紫色だし、光るクジラが飛んでるぞ！？」

「き、きつとドツキリか何かだよ！ほら、街並みは変わってない。ここは『地球』で、あれは……映像か何か」

「車が真つ二つに……！母さん！母さんどこに行ったんだ！？」

きつとこれが、彼女の最後の仕事となるだろう。

『皆さん、聞こえていますか。私は魔女クラン。貴方たちに道を示します』

恩人の名を借りて。

こうやってちよつとカッコついたりして見て。

後書き

はい、どうも。編集の篝火です。まずはこの秋会誌を手を取っていただきありがとうございます。

世間は未だにコロナコロナと騒がしいですがまあさすがに年内には終わるでしょう。そうすればこの地獄のように薄い会誌も、また息を吹き返すはず。

いやホントにそうなんです。なんですかこの作品数は。私が入れた小説、思わず昔の黒歴史フアイルからの掘り出し物です。夏休暇期間という時間はたっぷりあったというのにこのザマ。編集として何とか水増ししようと試みても、技術が無いため全没。レポートやら編集やらに追われ絶賛今眠すぎて頭回ってません。いつまでも学習しない愚か者です。ねえ。

過去の先輩方に合わせる顔がありませんが、とりあえず後書きの口頭文句としてげんしけんについての説明をば。

げんしけんとはイラスト、小説、音楽、ゲーム班に別れて活動してる、割と自由な創作部です。絵が下手だろうが文才が無かるうが関係無し。各々の作品をこの会誌のように形にできるという自己満足極まった部活であります。まあ会長さんが前書きで言ってくれてそうですが。

という名目上、部室で何かしら活動するルールは無いんですよ……。私が始めてげんしけん訪れた時皆さんボードゲームやってましたし。だから……部活という肩書きの『たまり場』。それが一番近いと感します。

このご時世、あの懐かしい匂いは全く感じられません、それでもこのげんしけんが未だに生きていることに感動しています。けどさすがに次の会誌は何かしらのルール決めましようかねえ？一人一作品とか。じゃなきゃ会長さんが頑張ってくださいってのに本当に潰れてしまう……

なんか色々崩壊してきてますねこの後書き。リアルな人間が睡魔に襲われるからでしょうか。製本する内に日付まで変わったのですよ。仕方ない仕方ない。

おそらく読み返した時に色々後悔が残るでしょうが、後書きの目的は果たしました。

まあ何か口を滑らしてしまうよりはいいでしょう(建前)
くっそ眠い(本音)

それでは、後書きから読んでいた方はどうかこの会誌に目を通してください。おやすみなさいじゃなかった、ここまでご読み頂きありがとうございます。

篝火

※この会誌内の作品はフィクションです。実在の人物・団体などとは関係ありません。

※この会誌の作品は全て部員のオリジナル作品です。イラスト、デザイン、文章、その他の情報の無断引用・複製・転載はお控えください。